

宗教施設と葬墓制

—レジストロ本願寺のことなど—

Religious Settings and Funeral Burial Systems in Brazil: Honganji and
Other Temples in Registro

佐野賢治
SANO Kenji

はじめに

今次の調査（2017年11月17日～26日）はレジストロ市サウダーデ墓地に関する宗教者の関与の聞き書きと墓標の碑銘及び平面図の作成を佐野と角南聡一郎がそれぞれ分担し、日系人の葬墓制の一次的資料を得ることを目標とした。レジストロでの調査日は実質4日、短時日ながら福澤一興会長はじめ日伯文化協会の全面的協力を受け、本願寺、聖公会、天理教布教所、生長の家の関係者から布教活動や葬儀に関する話を直接に聞くことができただけでなく、19日昼食時にレジストロ紅白歌合戦、夕刻には旧移民資料館（かつての海外興業株式会社の精米所と倉庫、現在新資料館をサンパウロ州とレジストロ市で構想中）訪問、21日夜にはレジストロ移民100年誌刊行祝賀会に参加、22日昼には市長と面談する機会を得るなど、地元の方々から多方面のお話を聞くことができた。23日朝レジストロ出発その夜、サンパウロ大学日本文化研究所で佐野は講演、学術交流。24日早朝、今後の調査の打ち合わせを森幸一教授と行い、その後、移民博物館、リベルタージの仏具店を訪れた後、聞きしにまさる交通渋滞の中、無事空港到着、帰国の途に就いた。以下聞き書きの内容をまとめておく。

1 レジストロ本願寺 元仏教会会長の小野一生、山村敏明、 元若妻会長の柳生てるゑの三氏からの聞き書き

1) 小野一生氏（昭和3・1928年7月6日生）談

日系二世、大分県人会の理事、妻のゆき江さん（1931年生）は産婆さんをしていた。父親は小野一で大正13（1924）年入植した。姉が3人、妹一人、第一人だったが、弟は昭和8年・1933年に早世した。父親は1953年に亡くなったが（法名は「一向院釈生念」）、1928年に発足した慈光会という家毎に回り番で行う「聞法の集い」の熱心な会員だった。それ以前は、葬式や周忌の法事にお経も線香もあげられない状態だった。この会にはセッテバラス市から生駒真澄先生が月に二度、第一、三日曜日に来て法話をしてくれた、30数名が集まった。戦争中は中断した。終戦の翌年1946



小野家の仏間と仏壇



小野家の墓

年、会は再開、お盆の法要、報恩講も行われた。レジストロ本願寺は慈光会の人たちを中心に1957年に仮の本堂を立て、10周年の1967年に建築に着手、1979年に落成した。小野一生さんは建設委員6人のうちの一人だった。本願寺の現在の「先生」（正式には、開教師・駐在主管という）は高橋一心師で法話はポルトガル語、その前は石田公海師で法話は日本語で行っていた。

小野家の墓はサウダーデ墓地にあり、家には仏壇を祀り、位牌、位牌帳、遺影などを収める。葬式は本願寺で行い、先生の念仏の後、正信偈を皆で唱える。葬式後、ヒトナノカ、四九日、一周忌、三年忌、七年忌、五十年忌を寺で行う。11月1、2日の灯籠流しには「小野家先祖代々之霊」と書いた灯籠を流す。

2) 山村敏明氏（昭和16・1941年5月30日生）談

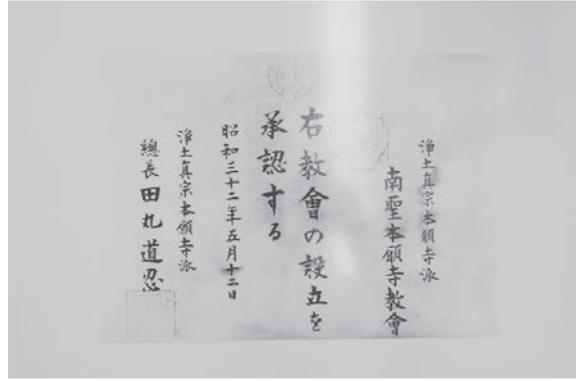
現リベイラ河沿岸日系団体連合会長・聖南西文化体育連盟会長。父親、明造は鹿児島県万世町出身で豊職人、昭和10年頃満州に渡り新京の大使館の横で店を出していた。1944年弟の病氣治療のために帰国、戦後の引き上げの難を逃れる。1954年2月16日、一家は第3次移民として神奈川丸でサントスに上陸。イビウナに六か月滞在、その後兄弟を頼ってレジストロに入植した。母、ハナエは看護婦・助産婦をしていた。産婦人科の医者が開業したのは1966年だった。信仰心の強い人で、後に本願寺の仏教婦人会の会長を5年務めた。

本願寺仏教会は護持会ともいい、80家族ほどが入っている。年会費は130リアル。副会長、書記、会計、監事の役割がある。寺の主な支出は先生の医療保険の半額負担300リアル、電気・電話代、エレベーターの維持費である。寺の修繕費などはそのつど寄付で集める。妻の純子さんとは1969年に結婚。純子さんはアリアンサ生まれで、本願寺の婦人会長を8年務めた。婦人会長は二年ごとに指名で選ばれる。婦人会の主な仕事は四十九日、一周忌供養の折に「オトキ」といい食事の用意を寺でする。100人ぐらい集まる、一人分いくらで費用を集める。また、資金を集めるために年に一度ビンゴを行う。サンパウロなどに行く旅行企画もした。1996年までは、若妻会もあったが婦人会に合併した。

人が亡くなると家で北枕に寝かせ先生に枕経を唱えてもらう。寺に貢献のあった人は寺の本堂で行う。葬式では先生の読経後、仏教会会長が弔辞を読む。墓場では会長が挨拶、参列者が線香とろうそくを供える。仏式でもカソリックでも同様である。埋葬後、遺族が並び家族の代表が挨拶をする。墓に持って行ったものを持ち帰ってはいけない。香典は一般的に50リアル、香典返しはタオ



レジストロ本願寺



設立承認書

ル1本とか、半返しする。近年は香典返しをやめるところが多いが、そうでない場合、49日の忌明けにあわせて、前もって忌明け法要の知らせを配る時に渡すか当日の帰りに渡す。香典返しは仏教徒だけではなく他の宗教の信徒の家でもする。最近では食器（大皿等）などを渡す。葬式の費用は法事も含めて最低5000レアル、最低賃金の二年分はかかるといわれる。

3) 柳生てるゑ氏（昭和12・1937年5月13日生）談

サウダーデ墓地には、祖父母・両親・兄・妹2人の7人のお墓がある。このうち1946年に3歳で亡くなった妹、はくゑは棺に納めず、そのまま埋葬した。祖父、吉三郎の墓はセメントで形作られていた。箱の中に頭骨が納められ、金歯が残されているのを見た。夫、蒸治さんとは1963年結婚、瓦・ブロック・セメントなどを売る建築材料店を営んできた。

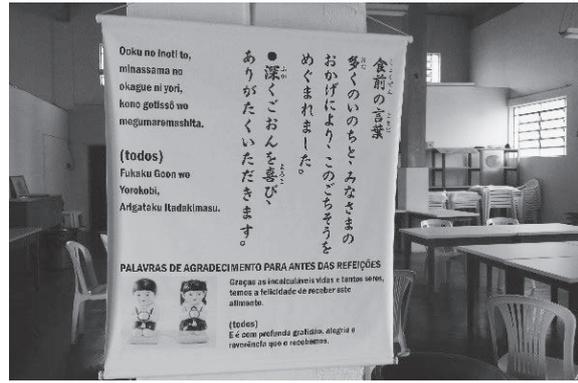
人が亡くなると、水を向けるといい水と御仏飯を供え、ロウソクと線香をともした。一番良い着物を着せ、好物などを入れ棺桶に納め、仏壇のある居間において通夜をした。先生に来てもらい枕経を唱えてもらい、一晩中必ず誰かが見守るようにした。棺の中には、ナイフとお金を入れたが、その理由はわからない。祖父の時には、夜通し紙でシカ花、花輪を作った。葬式には親戚、隣近所、友人、職場の人が来てくれる。香典は、普通50レアル、100レアル出す人もいる。親戚は200～300レアル。香典帳に記載し、香典返しの参考にする。香典返しは以前は砂糖、落雁で形作った蓮の花、菓子器、どんぶりなどだったがタオルに代わり、そして今ではやらなくなった。この間、猫は物置に餌を置いて遠ざけておいた。墓までは棺をトラックに乗せ、その横に家族と親戚が座って向かった。墓場にはお坊さんは来なかった。墓から帰ると、水と塩で手を清めた。七日ごとに49日まで隣近所の人はお参り来てくれた。49日には香典をもらった人をすべて呼んで寺で食事を出す。その後は、1周忌・3年忌・7年忌・13年忌・33年忌・50年忌を、命日に過去帳をもって寺に行きおこない、「先祖」「永代法要供養」を読み上げた。

死後の名前、法名は日本から御門主さまが来た時やサンパウロの西本願寺の一番上の人から「オカミソリ」の時に頂く。必ず「釈」がつく。位牌は今はサンパウロで手に入れるが、以前は先生が作り、輪袈裟・念珠・経本などとともに買い求めた。

本願寺には月の第一、三日曜日に信徒がお参りし、その後に会食する。食事は当番の人が作るが、各家でも料理したものを持って行く。12月は報恩講が行われる。サンパウロ別院の報恩講（1月12、3日）に行く人もいる。



本願寺本堂



本願寺地下食堂、「オトキ」などを行う

2 生長の家レジストロ教会

遠藤寅重氏（昭和11・1936年4月10日生）談

福島県田村郡大越町下大越中原27番地で生まれ育った。父、熊四郎は農業に従事、30代で亡くなる。叔父十郎の呼び寄せで、1957年6月12日、サントス港に上陸。マリンガ郡フロrestaに入植。10年間ほど山本コウヘイ氏のコーヒー園で働く。叔父十郎さんはその後マリンガからパラグアイに移り、大豆栽培などの農業に従事、その娘、美代子さんを娶る。子供は4男一女。30代の時、霜の降りないレジストロに移り、パイナップル、バナナ、ゴイアーバ（日本名、ばんじろう蕃石榴）、しょうが、アンズリウムなどを栽培、茶園も2アルケール（4.84 ha）経営、米は買い求めた。その後、電気・家具の店を経営、大工仕事もこなした。大きな建物ではレジストロから20キロほど離れたセッテバーラス（人口1万5千人）の文化会館を立てた。この地の商工会会長を4年間務め、その間、ナタール（クリスマス）の日に20メートルのケーキを作って子供を3000人招待したり、5月の第四土曜日の晩を「日系社会の日」としてビンゴの抽選会、12月3日に忘年会を行うなど、さまざまな活動をした。いつも菅原道真の「心だに誠の道にかなひなばいのらずとても神やまもらむ」の歌をよりどころにした。

生長の家は、マリンガで叔父十郎がすでに家で月に一度、第一日曜日に『神誌』の勉強会を行い、その会に参加していた。その教えは、人は神の子であり、うそをつかずに、正直に生きること、「真理」（卵の黄身にたとえられる）「唯心実相」心の法則を説く。

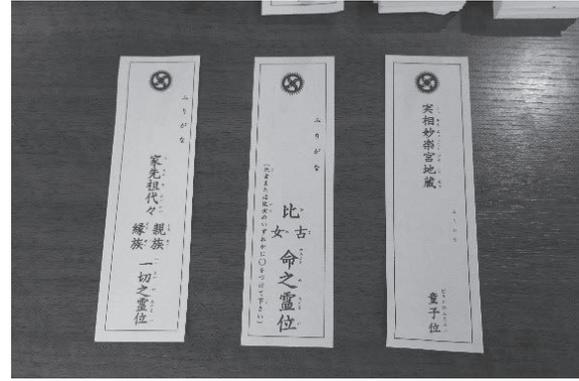
レジストロでは、第一日曜日にお茶会、谷口雅春先生の教えを学ぶ会を小さな家で開いていた。現在の生長の家教会の建物は30年ぐらい前に建てられた。生長の家の会員は日本人50家族、ブラジル人70家族が参加し、それぞれ相愛会、白鳩会、青年会、子供会、ジュニア会に属する。生長の家のラテンアメリカ・ブラジルの国際本部はサンパウロにある。遠藤さんはその講師補、試験を受けて講師、本部伝道講師となる。さらに国際本部（山梨県・北社市）の国際本部講師としてブラジルの南西教化支部長を務めている。

生長の家会員の葬式は教会で行い、「お祈り」を捧げ、霊界のよいところに行かれるように祈る。位牌には男性には〇〇比古命、女性には〇〇比女命とつけ、命日ごとに礼拝する。かつては神道的に二拝二拍手一拝だったが、今ではブラジルの一拝。流産子供養の位牌もある。

流産子供養はイビウナ市にある生長の家の錬成道場、宝蔵神社で行われる大祭で大規模に行われる。この日には本部講師式も行われる。



レジストロ生長の家教会



生長の家・霊位

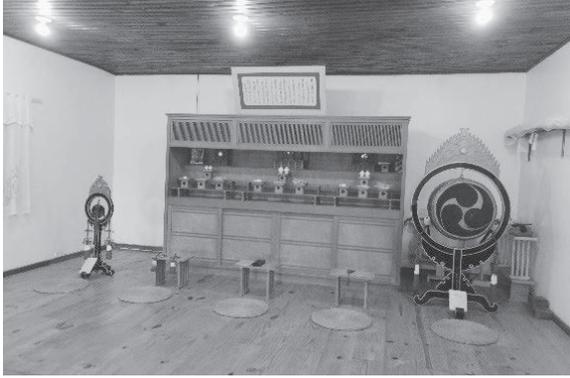
お盆の11月1、2日、ベイラリオ広場で灯籠流しが行われる。灯籠流しの正式名は「世界平和祈願と先没者慰霊法要」といい、1955年リベイラ河で溺死した日本人旅行者の供養をサンパウロの日蓮宗身延山南米別院恵明寺（石本恵明師開山、現住・石本妙豊師）がしたのがもとになった。その後1969年、国道（1962年に開通）での交通事故死者の供養が加わり、他の宗教も参加するようになった。移民80年祭を機に多宗教による合同慰霊祭となった。2日の本願寺、聖公会との合同慰霊祭の午前9時から10時までが生長の家の担当で、日本人とブラジル人の講師それぞれ5人が礼拝し、最後に講話をした。2017年からレジストロ日伯文化協会も共催に加わり、灯籠流し、盆踊り、若者によるリベイラ涼風太鼓、マツリダンスなどが行われるようになった。2017年度の灯籠流しには2万5千人にのぼる来場があり、人口5万6千のレジストロの町の一大行事となった。2018年度には移民110年記念祭としてさらに盛大に行う計画がなされている。

3 天理教ようき布教所

石田まゆみ氏（昭和45・1970年5月25日生）・石田豊氏（昭和47・1972年2月2日生）談

父親、石田道明（広島県江田島出身 2000年死亡）と母、ひろ子（北海道札幌市出身 2016年死亡）は天理教の修養会の機会に知り合い結婚後すぐにブラジルに渡る。1961年グアピアラに入植、トマト、エンドウ豆、ピーマンなど主に野菜を栽培、その後サンパウロでホテル経営、サンローレンソ、ジャクピランガと移り農業に従事、3男3女をもうけ、4人がブラジル、2人が日本に在住する。まゆみ氏は3女、豊氏は次男である。

ブラジルようき布教所は両親が1982年に住宅の一部屋を当て開所、2012年に30周年記念を迎えた。親教会は奈良県五條市にある大和陽気教会である。現在の布教所は1992年に建てられ長男、大助氏が継いでいる。長女はパラナ州ジュサラの天理教会の会長の奥さんである。大助・まゆみ・豊氏はともに教頭の資格を持っており、毎日朝勤め、夕勤めを20分ぐらい行う。普段は隣接のパン工場を19人の人を雇い兄弟で営んでいる。信徒は15家族30人ほどで毎月月並祭を第三日曜日の10時から12時に行い、その後、昼ご飯を一緒に食べる。大助氏は所長さんと呼ばれ、お勤めは日本語で、講話はポルトガル語で行う。各布教所からは誰かが月の第二日曜日に必ずサンパウロ州のパウラーにある伝道庁（村田雄治庁長）での「お勤め」に行く。信徒の葬式は布教所で行う。50日祭、一年祭、10年祭、30年祭を行う。お墓は町の共同墓地である。結婚式はジュサラの教会で行う。



天理教ようき教会祭壇



開所 30 周年記念写真

4 聖公会

田中貞夫氏（昭和元・1926 年生）談

父親は田中甲子亀、1908 年笠戸丸で来伯。氏は男 3 人女 4 人兄弟の男の 2 番目。父親は 49 歳で借金を残して亡くなった。19 歳の時、山からレジストロの町に出、大鹿商店で働いた。その後独立して運送業を営み、現在は 1976 年立てたりトパレスホテルはじめ 3 店舗の経営を子供たちに任せて隠居。最初の妻、秀子さん（1930 年生）とは 1952 年に結婚、2010 年に死別、墓はサウダーデ墓地。2012 年に再婚する。同墓地には、父・甲子亀（1941 年 5 月 16 日亡 行年 49 歳）、母・やすよ（1976 年 11 月 23 日亡 行年 87 歳）、妻の墓がある。田中氏は 1978 年、聖公会エピスコパウ教会を建立し、近年足が悪くなるまではミサの礼拝には必ず参加してきた。



田中家の墓



田中氏の建てた聖公会エピスコパウ教会

※本稿は『比較民俗研究』第 32 号（2018 年 3 月）に掲載された「宗教施設と葬墓制—レジストロ本願寺のことなど—」を再録したものである。